

再考ものづくり 今は夜明け前、 潮目は変わる

けいざい 進 話
SHIN WA

ものづくり指導者のノウハウを共有する「場」である「ものづくり改善ネットワーク」は7月、都内で設立総会を開いた。発起人の一人、東京大大学院教授の藤本隆宏は、会場に集まった約80人の製造現場で働く人たちに語りかけた。

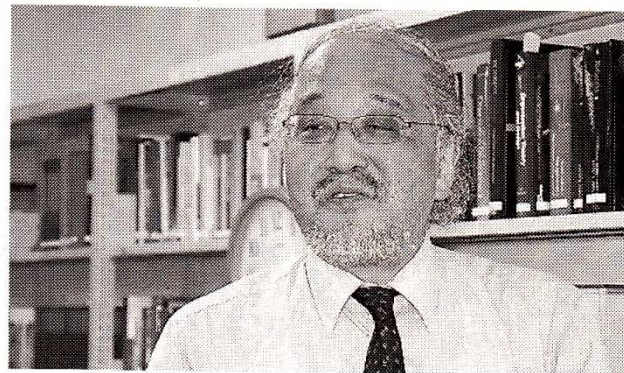
「日本の製造業現場は『夜明け前』だ。ずっと闇が続くと勘違いし、国内工場を閉鎖してまで海外展開すれば経営を誤る」日本の製造業は空洞化し、未来はない……。こんな言説が流布し始めて10年は経つ。確かに多くの国内工場が閉鎖され、ものづくりの海外流出は続く。

だが、1980年ごろから毎週のように国内外の工場を見て回り、現場を分析してきた藤本は「自動車産業などに代表されるものづくりの現場では、『失われた20年』の間も地道な改善が進んできた」と指摘する。

現場の作業員1人が1時間当たり標準的なクルマを何台作れるかをみると、最近の日本の組み立て工場は0・1台。この20年間で生産性を約50%アップさせた。1人が多くの作業をこな

再考ものづくり ④

今は夜明け前、潮目は変わる



東京大大学院教授の藤本隆宏
|| 東京都文京区

す多能工も進化し続ける。

だが、国内のものづくりの現場には「危機」があった。団塊の世代の熟練工が2007年以降、定年を相次ぎ迎え始めたからだ。「彼らの知識や技術が現場からなくなれば大変」という危機感が、藤本にはあった。

05年、東大に「ものづくりイニストラクター養成スクール」をつくったのは、現場改善の師範役として退職した熟練工を育てるためだ。その数は今年で100人になる。さらに、経験知を共有する仕掛けとして、改善ネットワークも立ち上げた。

日本の製造業をめぐる環境は「潮目が変わりつつある」と藤本はいう。賃金が5年で2倍になるという中国をはじめ、タイ、ベトナムなど新興国の賃金上昇は激しい。日本の20分の1とされた中国との賃金水準の差も、いまや5分の1に近づいた。自動車産業より改善余力がある他産業も努力すれば、競争力において「新興国は日本の射程内に入ってきた」と藤本はみる。

3Dプリンターなどものづくりの新技术も生まれた。中国の工場にも自動化ラインが増え続ける。賃金差よりも、自動化ラインも含めた生産ラインを効率的に運用する力が問われる時代になってきた。

藤本は最近、山形大教授の柴田孝や地方で現場の改善活動に関わる人たちと「ものづくり成長戦略」という本を書いた。苦難の時期は終わり、日本の成長戦略はものづくりを抜きに語れないという問題意識が、そこにはある。改善ネットワークを設立したのは、企業や地方の活性化を支援するためでもある。

「いまも日本にある『良い現場』を残したい」。藤本の思いである。

・ || 敬称略
(編集委員・安井孝之) || 終わり

■この連載へのご意見は、keizai@asahi.comまで。